

小説「サマネイ」(続編)

多谷 昇太

【※】(三) 山本僧侶 の続き

「はい、あ、あの、北国大学(仮名)です」と俺は似非大学生を悟られまいかと危惧しながら山本に答える。「ああ、あその学生さんね。校名はよく知ってますよ。倍率高いんでしょ？あそこ。おたく、たいしたもんだね。それで、専攻は？」と来た。俺は元来嘘をつくのがへたですぐに顔に出てしまう性質である。もう居直るしかなかった。「油絵です。洋画です」ややぶつきらぼうに云うと「ほう」と語尾を上げていかにも疑わしげに山本は受ける。まるですべて仏教大学生から聞いて知っているぞと云わんばかりだ。もしそうなら俊田があらかじめ「かまわないだろ？」とばかり仏教大学生に伝え彼が山本に伝えたのだろう。しかしこうしてそれで受けたのならいまさら思わせぶりをすることもないではないかと、いささかムツとしたがそれの口にはできない。おそらく山本の性質なのだろう、その類のことをからかわずにはおれないのだ。彼が矛を

おさめてくれるのを待つしかないのだがしかしこれも俺の性質なのだが、俺は至ってこの手の思わせぶりに弱かった。もし嫌われているのなら仕方がない、あえて取り入るなどまっぴらだとする一見いさぎよい性癖とも絡まって、すべてをパスしてしまうのだった。そこを何とか工夫して相手に自分をアピールするとか、許してもらおうとかする器用さも、堪える心もまるでなかった。そこには幼少期の育ち方も大いに関係しているのだが、またその辺りがこのパーソナルの小説

【※】しかし決して自分小説などとは捉えないでいただきたい。必ずや汎的な要素が、少なからずあると自負しています。』の眼目なのだが、その趣旨は追々述べることとしよう。とにかく、ここでこらえねばあとあと困るだろうとわかっているのに、えーいっとばかりやってしまうのである。ぶちまけてしまうのだ。いまもご同様だった。「いや、お気づきかも知れませんが実は北国大出とは真つ赤な嘘で……」おいおい、村田氏、それはちよつと……」傍らの俊田があわてて止めるがあの祭りだった。

「いや、いいんだ」と俊田を制して「実は嘘で、私は高校しか出ていません。サマネイになるのにその方がいいと云うのでつい方便的に詐称してしまっただけです。

もしそれが駄目だと云うのなら……」しかし意外にも他ならぬその、審査官の山本から止めが入った。「いや、なにも、誰もそんなことまで聞いてはいませんよ。詐称なら詐称でかまいやしない。むしろ正直に云ってくれるのが気に入った。うん……」と一呼吸置いてうなずいて見せた後「いや、あんたね、この寺には元ヒッピーだったアメリカの青年とか、バングラデシュで食い詰めたのとか、さっきのソムスイとか色々いるんだから。あんたなんかむしろいい方だよ」と俺をかばってくれたのだった。横で俊田がホーという顔をしている。こちらも御同様だった。それならばとばかりあらためて固唾を飲んでかしまっている山本は続けて「ほんと、ぜんぜん気にしなくていいから。ここにいればあんた、食事もタダ、住まいもタダ、バスも電車もタダで乗り放題。いいこと尽くめなんだから。やっぱりあれでしょ？あんたもそのへんのところを当てにして来たんでしょ？」と、本音を云えよとばかりいたってザックバランスな調子で迫ってくる。それに甘えたわけではないが詐称を吐露した手前、俺は問わず語りに洋行に至った経緯まで絡めてみずから言上するに至る。少なくとも絵描きというのは本当だという意地もそえて。彼山本のもともとの思いはその賜った言

質とは裏腹に、やはり『ぬけぬけと詐称して来る奴など気に食わん、顔など見たくない。日本人なんだろう？おまえ。もしどうしても来るんだしたら、どんなタマだか、俺が見抜いてやる』だったのだろうし、始めの狸寝入りもそれによるのに違いなかった。してみるとはからずも先に紹介した俺の性癖が功を奏した、彼の許しを得るのに役立つことになる。いまさらとても言えた義理ではないが、小手先のごまかしと謙虚、はたしてそのいずれが世を生きる指針となるのかと問えば、この顛末がその解答であるのかも知れない。例のランボーのこと、また人生は奇跡以外の何者でもないというあたりのことまで聞くと、わかった、心得たと云わんばかりに山本は「ははあ、なるほどね。いや、よくわかりました（君の甘ちゃんぶりが）。いや、それならこちらもザックバランスに云うけどね、私だってね、本当は本物の坊さん指向じゃないんですよ。わたし実 はね、もと俗に云う商社員だったの。リサーチ等でここのインドシナあたりにはよく来てただけど、その時は政治、体制的に国境の行き来が困難で、しかし（自分の僧衣を手でつまみながら）このオレンジ色の僧衣をした坊さんたちだけが、自由に国境をフリーパスするのを見てたわけ。ははあ、これは使えるなと思

って見てただけで、後に独立しようと思つて商社を辞めましてね、それでそのあと坊さんになつたんですよ。こんどは自分の顧客や販売ルートを探ろうと思つていま坊さんをしてるわけ。だからほとんどあんたと同じよ。もつともあんたと違つて正式な手続きを踏んでも、金も払つてるけどね」と云つてきさくに笑つた。

申し遅れたが「金」云々というのは本来得度、サマネイのパンサー料が要るのだつた（少額ではない！）。

それを払つて一時的な見習い僧、サマネイになつたのだから彼にとつてはすべてタダどころか、すでに一括して事前に払い込んでいることになる。もつともその見習い時期、パンサーはとつくに過ぎていようし、いまこうして新人の日本人サマネイを迎えて指導する役をおおせつかつているくらいだから、いまの彼の本当のところはわからなかつた。少なくともまだサマネイであるということはなさそうである。であるなら彼の近未来への意向はともかくすでに正式な山本僧侶であるということだ。もとより俺に関して云えば得度・パンサー料もすべてタダだつた。無銭飲食と住居が目的だからあたりまえと云えばあたりまえだが、ただしそこには経緯があつて、実は俺に代つてその費用を立て替えてくれた人がいるのである。タイ人の在家とい

う存在で、裕福な篤志家であるのに違いなかつた。僧への寄進が功德となることを奉じている方、名前も知らないそのどなたかがいてくださつて、「どうぞこのお金で仏道修業をなさってください。在家の私のかわりとなつて戒律・精進にお励みください」と、畢竟このような俺ごとき凡夫にさえ寄進してくださいだつたのだ。三宝への信仰篤き人と云わねばならない。このように、この国ではいまだ三宝への敬いと寄進が現実生きていた。この方を始めタイの方々に対して、また別の存在『※のちほど詳述する』に対しても、俺という男は不逞・恩知らずのやから以外の何者でもなかつたのである。

しかしその辺は自らの中で割り切つていただろう山本は「よし、わかりました。ではね、三日後の同じ時刻頃にまたここへ来てください。あんた一人で。具体的な段取りからわたすものから、それまでにすべて用意しとくから。いいね」と、今度は逆にあたかも逃げちゃだめだよと云わんばかりに、また商社における部下に命令するように指示してくれた。どうやら俺は彼の審査を通つたらしい。だが前記したごとく詐称ぶつちやけで半ば出家をあきらめていた俺にあつては今度はそれを些かでも億劫に感じてしまう。濃密な人間関

係を嫌うという胸に（御存知だろうか？）算命占星学の龍高星を持つ者として、たとえ相手が誰であつても必要以上のふれあひは苦手なのだ。しかし改めていまのわが懐具合を思い起こし再びの水島上等兵になるほかはなかった。ただ今度はもう俊田はいない。気弱げな俺の帰る背中に「こんど来る時は寝てないから、安心して」と励ますように山本が声を掛けてくれた…。

（四）得度式・鑑僧侶

「ウガーサ・ワントアーミ・パンテー。サツパン・アラッタタン・カマタメ・パンテー。サートウ・サートウ・アヌモーターミー」正面の大きな金色の釈迦像が俺を見すえている。温和なお顔があたかも仁王像のようにおそろしく感じられる。その釈迦像の前に住職代理が座り、その前に高位の僧侶四名が二人づつ左右に分かれて合掌結跏趺坐している。住職代理がバーリー語で俺に得度の誓いを問い、下座で起立合掌の俺がバーリー語で答えるのだ。もちろんバーリー語など一語もわからず、前もってわたされていたカタカナ文を必死になつて暗記して問答しているのだつた。起立合掌する俺の姿は頭をきれいに剃り上げ、両の眉毛もあとかたもなく落とされていた。オレンジ色の僧衣を身につけ

て、姿ばかりは立派な僧侶となつている。しかし内実とは云えばいまさらのように得度の厳肅さを知つて、いかに自分の心構えがいい加減なものだつたかを痛感しているのだつた。おそらく「汝、くの戒律を守るや否や」の類のことを聞かれているのだから当然意味はわからない。ただそれが住職代理の声ではなくその奥に鎮座します仏像の声となつて、あたかもいままでの生き方を問われているように、いや、叱責されているように俺には聞こえるのだつた。この類の宣誓を、人は誰も、どこかで為した記憶はないだろうか？荒唐無稽と笑われそうだから詳しくは云わないが、ひよつとして生まれる前、霊であつた時に然るべき存在の御前で、これからの人間生活への指針を宣誓奉じたようにな…そんな原的記憶がふつと心をよぎる。その感覚で云えばいまのこの得度の瞬間は「そのすべてを忘れおつて！」と叱責を受けているような、針のむしろ以外のなにものでもなかつた。事実、代理の声は次第にとげとげしくなり、さつさと式を切り上げたい風がありありとなつてくる。『誓文の意味も解さぬ者との問答など馬鹿馬鹿しい』が本当だったかも知れないが、もしかしたら俺の心構えのいい加減さと、心そのものの汚れを見ておられたのかも知れない。その代理はじめ居

並ぶ高弟たちはタイ人僧侶だったが一人だけ日本人僧侶がまじっていた。山本僧侶ではなく鑑という方で、日本の永平寺から赴かれているこちらはプロの僧侶だった。年は三十なかばくらい、いたって端正な顔立ちをしている。たかだかサマネイの得度とは云え、いやしくも僧形には厳しいタイ僧侶と違って、一般人の一時的な仏道修業なら致し方なし、とでもするような大乘の（？）おおらかさがその表情に出ていた。代理のいらつきなどどこ吹く風、すました顔で合掌唱和している。

この何日前にこの鑑僧侶が俺の髪と眉を剃ってくださったのだった。場所は大理石寺ではなくワット・パクナム、市郊外に位置するチャオプラヤ川沿いのこちらは禅寺である。そう云えば永平寺も鶴見の総持寺と並んで日本の禅宗の総本山だったが、その寺から赴任されている眼前の鑑師のことや、大理石寺からパクナムへ移った経緯など、割愛した部分は次に述べよう。住職代理ではないがいまは早く得度式を終らせてほしかった。仏からの叱責だけではなく、おそらく、この先も俺はあの世での言挙げを体現できそうもないからだ。縁というものに気付くのに俺ははまだ至って愚鈍であり、食、住を与えられ、生き直しの聖なる場所

すら与えられているのに、それらのことに悉皆（しっかい）無知蒙昧のままだった。この大罪を後に代理ではなく、御住職その方から指摘されるのだが、それはこの小説の最終章でのことではある。（以下次号）



タイの釈迦像